「苦労知った」住民意識変化

訪問看護・介護向けに駐車場確保

1面から続く

介護や看護の在宅サービス事業者が利用者宅を訪問する際、乗用車を止める場所が見つからない―。草津市社会福祉協議会にとっても長年の懸案だった。

「1日3回、駐車違反で警察に取り締まられたことがありました」。草津市の社会医療法人「誠光会」介護事務局の濱田康夫さん（52）は振り返る。

路上駐車の反則金1万5千円の負担は大きい。みとりの場面に出向いたケアマネジャー、ヘルパー、訪問看護師、訪問医の車4台全てに駐車違反の切符が切られた事例もあった。利用者宅から3キロ離れた場所に車を止め、医療器具を自転車に積み替えて訪問することもあるという。

市社協が在宅サービス事業所に実施したアンケートでは、「駐車場で困っている」との回答が9割を超えた。

問題の解決に向けて2022年度、市社協の伊藤美紗都さん（28）ら職員が三つの学区で動き出した。「制度で解決するのではなく、住民が意識を変え、自ら動く地域を作りたかった」と狙いを明かす。

住民を交えた会議で現状をデータで示した。滋賀県は平均寿命が男性全国1位で、介護が必要な期間は全国平均より長い。山田学区は高齢化率30・7％で、1人暮らし高齢者が319人。在宅サービスのニーズは増え続けていると説明した。

事業所側の声も聞いた。山田学区社協会長の中瀬清美さん（63）は「事業所の苦労が初めて分かった。遠くから歩いて来られている姿を見て、申し訳なく思った」という。

ワークショップを重ね、住民が「自分事」として考える場を作った。山田学区ではチラシ約600枚を配布。町内会長が一軒ずつ訪ね、空いている駐車場の提供を呼びかけたところ、個人宅の協力が多く得られた。

中瀬さんは「『駐車場の確保は事業所がやることでは』という声もあった。でも話を聞くうちに、みんなの意識が変わっていった」と話す。

上在宅サービス事業者向けに自治会館前に設けられた駐車場＝草津市社会福祉協議会提供
下駐車場確保について話し合う草津市社協や学区社協、事業者の担当者たち（同市大路2丁目・キラリエ草津）

草津市社協 データで説明 〝地域の一員〟に

笠縫東まちづくりセンターに設置された電動アシスト自転車。事業所が利用者訪問に使用できる＝草津市社会福祉協議会提供

笠縫東学区では、目印として「地域ささえ愛応援駐車場」と記したコーンを貸し出すことにした。車から乗り換えて使える電動アシスト自転車もまちづくりセンターに用意した。障害サービス事業所も初めて加わり、分野を超えた連携のモデルとなった。最終的に自治会館や事業所のほか個人宅が駐車場を提供し、約70カ所、200台分を確保した。

変化は事業所側にも表れた。濱田さんは「以前は『行ってあげている』という意識があった。でも住民が動いてくださり、地域に見守られているのだと私たちの気持ちも変わった。今は地域の一員だ」と語った。

利用者からも歓迎されているという。「コインパーキングの料金を負担しなくて良くなった」「マンションの来客用駐車場の申請の手間が省けた」。駐車場の確保は、サービスを受ける側の負担も軽くしている。

草津市社協の取り組みを参考に、東近江市や岐阜市で同様の取り組みが始まった。日本地域福祉学会の学会誌にも掲載予定という。

伊藤さんは「超高齢化社会となる中、住民の意識が変われば自然と解決策が生まれる。これからも地域の課題を一つずつ解決していきたい」と力を込める。

（飯嶌将太）

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます